

今月は「世界」と「わたしの眼差し」とのあいだに産まれる感情や、それを映す行為が詠われているような印象の作品に惹かれました。

構内ですれ違うとき

細くなる

人と人

消えずに歩きだす

高良真実

「細くなる／人と人」というフレーズに、連帯しきれない人間の像を描こうという意志を感じます。また、「消えずに歩きだす」という一節は、そうした人々の中に内在する希望を表しているようにも見えます。

ぱりんぱりと水面の月を割る

西春奈

擬音を用いながら、割れることがないものを割ってしまう。そこには閉塞感を打ち破りたいといった思いが込められているようにも見えます。また「ぱりんぱりん」という、かな表記は作品自体を明るいのにしていきます。

卒業アルバムで

笑ってる方の佐藤が

死んだ方の佐藤

うすしか

同じ苗字を持つその他おおぜいのうちの一人でしかない佐藤が、「死んだ方の佐藤」という言い方することで、取り換えのきかない「佐藤」その人になります。固有の死の発見は、有限な自身の存在を思い起こさせてくれます。

むずかしいかんじを

しらなくてごめんなさい

でもこれは

うつくしいうみ

うすしか

「でもこれは／うつくしいうみ」という断定に、難しい漢字のような世界から、自身の大切な海を守ろうとしている様子が見て取れます。説明を排除することで作品の説得力がより増しているように感じられます。

私ではなく
私の詩を
覚えていてくれた人がいて
私の輪郭が少し
光った気がした
春町 美月

「私ではなく」という導入部において作者の決意とさびしさが感じられます。「私の輪郭が少し／光った気がした」という箇所は、他者による自身の救済を表しているのかもしれませんが。

少しずつ
いなくなってさよならになる
合川秋穂

「さよなら」というのはそうやって出来るのかもしれませんが。「すこしずつ／いなくなって」という箇所がリアルです。

食パンのくぼみ戻らぬ春の宵
長谷川柊香

「食パンのくぼみ戻らぬ」という一節で不可逆的な人生そのものを想起することが可能です。ですので収まりのいい「春の宵」という季語を使用せずとも、それ以外のいろいろな言葉を用いて表現の可能性にチャレンジすることもできる作品かと思います。